

## 産学共同と医学部の役割



遠山 正 彌\*

The industry-university cooperation &amp; the role of medical school

Key Words : Medical Technology, Tissue Engineering, Role of Medical School

産学共同における大学とりわけ医学部の役割について考えてみます。医学部の研究は生物学に近い基礎医学から臨床医学の最前線まで極めて幅広い領域に及びます。医学部が産学共同に貢献しうる領域は基礎医学と臨床医学の境界領域、そして臨床の現場で直面した手術法、機器などの諸問題でしょうか。

いずれの分野にせよ大学側が求められているのは人材育成でしょう。この課題は何も産学共同に限った問題ではありません。大学に課せられた大きな使命の一つです。最近の若者の気質が云々されますが、いま感じるのは「人は育つものではなく育てるものだ」ということです。大阪大学医学部が今取り組もうとしている若手育成システムは「独立助(準)教授制度」の導入です。医学部の研究体制は講座制を軸とするピラミッド型です。このシステムは諸悪の根源のように言われてきましたがその風評は正しくありません。個人がばらばらに個々の課題に取り組んでも得られる成果は遅々とし、国際競争に勝てるはずもありません。重要な課題にチームとして取り組んでこそ勝機が開けます。その意味でもすぐれたリーダーのもとでの講座制は医学の発展に大きな貢献を果たしてきました。この観点から大阪大学医学部は不完全講座を解消しチーム研究の充実を図っています。唯従来のこのシステムだけでは優れた若手の

育成は困難です。すぐれたリーダに、組織に埋没する恐れがあるからです。そこで大阪大学医学部では「独立助教授」制度を創設します。共同研という研究の場、年間約1000万という研究支援を5年間提供し研究に集中させ成果が上がれば教授への道を切り開くというもので、4人程度の枠を検討中です。ただ、これまでの所属教室からは完全に独立することが前提です。大阪大学医学部ではこのような制度のもとで独立心旺盛な研究者を集め競争を通じて人材育成を図って行きます。人材育成には立場、研究の場と環境、研究費の提供が求められます。まさに「開け才能」です。

産学共同研究に関する大学の大きな役割の一つは基盤研究から生まれてきた成果をシーズに育てることです。大阪大学医学部はシーズを育てる場として未来医療センターを活用しています。未来医療センターは大学院重点化に伴い設置されたセンターで病院のスペースを借り受け医工連携を軸として人工心臓、軟骨、骨、角膜など10以上のプロジェクトが動き前4者は実用化段階に至っています。しかしながら現在の場所はあまりにも手狭ゆえ、産学の共同研究の場が十分に確保できずこれ以上の発展は困難です。そこで我々は産学共同で「未来医療推進センター」を一つの建物として立ち上げ、同じ建物で、同じフロアで企業とともに再生医療の基盤技術開発・実践に取り組む計画を立てております。是非とも再生医療に興味のある会社の参画をお願いする次第です。これまでの「再生医療」はえてして「発生」研究に留まったり、研究費獲得のためのかけ声倒れになるケースが多く見られます。我々はそうではなく、真の再生医療研究の拠点を構築し、産学の共同研究のメッカとしての場を大阪大学医学部に造り上げようと考えてます。基盤研究の成果から出てきた



\*Masaya TOHYAMA  
1947年4月生  
大阪大学医学部卒、医学博士  
現在、大阪大学大学院医学系研究科長、  
医学部長、神経機能形態学講座教授、  
神経化学  
TEL 06-6879-3220  
FAX 06-6879-3229  
E-mail : mtohyama@anat2.med.osaka-u.ac.jp

シーズを企業と共同の場と視点で育て上げる場を提供することも大学の大きな使命です。ただ企業と研究者、企業とシーズとの出会いを設定するのは医学部の力の遙かに及ばないところでもあり、異なる取り組みが求められます。

日本の厚生行政を巡る大きな問題点は治験や薬の認可の異常な遅さとかたくなさ（前例主義）でしよ

う。これを打破するには外国との連携も視野に入れねば成りません。このことも大学の使命といえます。

いずれにせよ産学の振興は大学の大きな柱になりました。両者がお互いの軸足を揺るがすことなく連携を柔軟にとることがより一生の発展につながるでしょう。

